

自然のもたらす心の癒し－病跡学的視点から－ 俳人種田山頭火の場合

大森 健一

獨協医科大学名誉教授

Pathographical View of Healing by Nature － A case study on Haiku poet Taneda Santouka －

Kenichi OMORI

Dokkyo Medical University

ただいまご紹介いただきました、大森と申します。本日は、人間・植物関係学会、このような素晴らしい会にお招きいただきまして、ありがとうございます。平成16(2004)年に淡路島で人間・植物関係学会の国際大会がありましたときにも、お招きいただき、大変嬉しく思っておりました。この場で、大会実行委員長の高江洲先生をはじめ、関係諸先生方に、お礼申し上げます。

今大会のメインテーマ「人間の幸福と植物の存在」、なんと素晴らしいテーマだろうと感心しています。昔から人は、植物の存在そのもの、あるいは、もっと広く、自然の園、これによって心が癒されるということは、しばしばありましたし、また、われわれも、個人的にもそれを体験しています。例えば、

「願はくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」。

これは、西行法師が詠んだものですが、このような桜花に対する思いであるとか、花との一体化、それによって満たされる往生願望を秘めた歌は、日本人にとっては、非常に親近性があるんですね。皆さんもお聞きになって、感じるものがたくさんあるのではないかと思います。

このような立派な歌人でなくても、例えば最近では、素人の、某大学の学長の、卒業生を送るときの「梅が香に凜凜として学舎出づ」というのがあります。これ、実は私のものです。あるいは、ある女性の「初孫の齒の生えしとや福寿草」。これはここにおります私の家内の作です。

素人でも、花や植物に自分の気持ちを託し、そして、それと同時に一体化していく、それによって気持ちが救われる、あるいは、その気持ちを外に放出することに

よって、自分に力が湧くということは、しばしばあるのではないかと、思います。

午前中から非常に興味深い話を聞かせていただいております。私は精神科医でございますので、実は40年ぐらい前から精神科病院で、今でいえば、園芸療法のたまごに携わっておりました。しかしその頃は、園芸療法とは申しませんでした。作業療法ともいいませんでした。要するに、やることのない、長く入院している患者さんと庭や畑へ出て行って花を植えたり、あるいは近所の畑を借りて、ジャガイモを作ったり、トウモロコシを植えたり、そして、それを収穫して食べたりしていました。

ただそのときは、本当に治療という視点をどこかできちっと踏まえていたか、というと、そんなことはなかったです。私自身も楽しいし、患者さんも楽しいからやっているという、それだけでした。当時、作業療法という言葉が入ってきましたけれども、治療の視点というのは、きわめて曖昧だったと思います。

今日、お話で出てきました、人間がいかに自然・植物に癒されるか、ということは、ほとんどの患者さんにとって、同じような意味があるとは思いますが、必ずしもそうでもない場合も、実はあることを知っておいていただきたいと思います。

創造する行為というのは、人を育てます。だけど、創造することは、「創造の病」という概念がありますように、物事を作れば、物事を考案して、なにか行動すれば、もっと端的に言えば、絵を描けば、みんな精神障害が治るか、心は健康になるかということ、決してそんな場合だけではありません。絵を描くことによって、どんどん状態が悪くなる人もいます。私は芸術療法学会の理事長をしておりますが、この辺のところを踏まえて、問題点を常々考えています。

いずれにしても、自然のもたらす心の癒しというのを、一体どういう方法論で考えたらいいのでしょうか。その方法論の一つとして、実は、病跡学というのがあります。病跡学の視点から、その具体例として、皆さ

2007年8月25日受付。

本稿は、2007年6月2日に東京農業大学で行われた人間・植物関係学会2007年大会シンポジウム基調講演の録音記録を藤岡真実(東京農業大学)が起稿し、講演者が加筆修正して作成したものである。

んのご存知の、俳人種田山頭火を取り上げて、お話ししようと思います。最初に、その病跡学についてお話しします。

1. 病跡学とはなにか

病跡学は、Pathographie（パトグラフィー）と申しまして、その定義は「傑出人、天才の精神の異常性と、その創造との関係、その生活史的展開を明らかにしていく生活記録、あるいは伝記の一形式」となっています。

要するに、精神の異常と創造とは、天才ではどのような関係があるか、そして、それがどのような形で、生きていく間に、創作されたものとその創造の行為と、精神の異常が絡み合ったのか、を追求していく学問なのです。実は、この学問は、古代ギリシャ時代の、天才論の系譜を引いています。

ギリシャ時代から、天才というのは、どうしてあんな素晴らしいことができるのだろう、一体あの人たちの精神状態はどうなっているのだろう、異常じゃないか、並外れている、というわけで、天才と狂気との関連は、絶えず問題となっていました。

1880年代、C. Lombrosoというイタリアの法医学者にして、精神科医がおりました。彼は、犯罪者の精神障害を一生懸命勉強して発表した人ですが、天才を研究した人でもあります。彼は、「天才というのは、てんかん系に属する、精神病か神経症である。」という結論に達しました。そのときは大いに、世間の人から顰蹙（ひんしゆく）を買いました。でも、当たっている面も一部あるのです。実は、別の学者たちのいろんな報告がありますが、少なくとも、天才の80%ぐらいは、精神病ではないとしても、精神医学的な診断がつく、ということになっています。

元に戻りますが、病跡学とは、始まりは天才と狂気との関連を追求する学問ですが、有名な精神病理学者で哲学者のK. Jaspersや精神科医のH.W. Gruhleが、今お話ししたような病跡学の概念を提示しました。

すなわち、素晴らしい創造行為をした人と、その人の精神状態はどんな関係があるかを追求したのです。したがって、それは、われわれの先輩、飯田真先生がいわれたことですが、確かに、天才の解析・追及の一形式であると同時に、そこでみられる創造の病態心理学が、創造の内面的秘密を探求するうえで、きわめて有力な方法になりえます。

この「病跡学」ということばを作り出した方は、P.G. Möbiusという、ドイツの精神科医です。彼は1906年に、たとえば、Robert Schumannの、あの音楽の創作行為と、彼の精神障害との間には、どんな関係があるんだろう、というようなことを追求した人です。さらに、「Über Scheffels Krankheit」という論文を書きました。Scheffelというのは、ドイツの画家・詩人にして、小説家です。

その人の創作活動と彼の疾患がどんな関係があったのだろう、というわけです。このときにPathographieということばを使って論述しました。これが、日本にも導入されたのです。

わが国でも、大勢の先生方が、いろいろな人物の病跡学を行いました。例えば、芥川龍之介のあの、すばらしい小説、あるいは、常人では思いつかないような描写は、芥川龍之介の精神の障害と、どんな関係があったのかというのです。現代の統合失調症に近い状態があった、といわれていますが、その創造行為とどのような関係があったのか、あるいは、芥川龍之介のあの創造の行為は、芥川龍之介を救うことに繋がったのだろうか。こういった研究がされています。太宰治、夏目漱石、西田幾多郎、島崎藤村、その他、現代の作家にいたるまで、いろんな病跡学的な研究が行われております。

しかしながら、昭和30年代の、病跡学に対する、精神科医の批評は、きわめて厳しいものでした。「病跡学は精神科医の趣味や遊びだ。」「治療行為にはつながらない。」「精神科の教授が現役を辞めると、病跡学をやりたがる。」「臨床とはまったく関係ない。」あるいは、「真の医学ではない。」というわけです。じゃあ、真の医学とは何なのか、ということになります。あるいは、「絵を描くことで精神病が治るなら、画家は病気にならない。」こんなアホなことをいった人がいます。実は、私です。大学時代の会合の時に、先輩に私がこういうことをいって、非常に先輩を悲しませました。しかしながら、今は違います。

病跡学が教えてくれるものは、決して、天才や傑出人の診断することに止まりません。目的としているのはそういうものではありません。その天才の創造活動と精神障害の相互関連を研究する。その相互関連をその学問が教えてくれる。そういうものなのです。そして、それは精神科臨床へ還元でき、精神科臨床における診断とか治療への示唆を与えてくれます。

実は、天才には非典型的な精神障害を病む人がきわめて多いものですから、精神医学的な診断をする、あるいは、診断をより精緻にするという意味では、非常に有効なのです。

それから、創造の秘密、これを教えてくれます。特に、狭く取れば、創造活動を介して治療していく芸術療法、あるいは、園芸療法もそうだと思うのですが、この創造の癒しというものが、どんな患者に、どのような影響を与えるのかを、病跡学は教えてくれます。あるいは、逆に、病跡学を研究している人に、例えば、花を子ども達と一緒に育てると、子どもがこんなに変わるんですよ、というようなことを教えてあげれば、病跡学の研究もさらに深まるし、相互援助をすることもできる。こういう意味合いがあるのです。

そういう意味で、自然の心の癒しを、病跡学という視点から、どれだけ理解することができるかを、お話しし

ていきたいと思っています。

2. 種田山頭火の生涯

その例として、山頭火の話をしようと考えました。山頭火は、人生の後半のほとんどを、お坊さんの姿をして、門付けをしながら、行乞放浪をして歩きました。その間に、人の心を洗いあげるような、非常に新鮮な俳句を作った人物です。一方では、放浪した、自己の姿を日記とか手紙に、次々と書きました。そういう放浪を続け、太平洋戦争の予兆を含んだ、暗くなりつつあった昭和15（1940）年に、松山の一草庵という草庵で、59歳で亡くなりました。

亡くなったとき、隣では、俳句の仲間、句友などが集まって、俳句の会を開いていました。その隣室で、彼は一人、静かにこの世を去りました。この人物の話を少ししたいと思います。

これが山頭火です（スライド）。笠と金属でできている鉢を持って、お坊さんの格好をしています。一笠一鉢、その格好をしながら、歩いてたわけです。

若い時の山頭火ですが（スライド）、スラーツとして、相当な近視だったようです。

まず、山頭火の略歴を簡単にご紹介してきましょう。

山頭火は、山口県の、現在の防府市に生まれました。本名は、種田正一。お父さんは種田竹治郎といいますが、その長男として生まれました。お姉さんが一人居ました。

お父さんの種田竹治郎さんという方は、今でいえばちょっとお坊ちゃんであらしない人でした。種田家というのは、大地主で、種田の上に大という字が付いて大種田と呼ばれた、そういう家柄でした。

ところが、このお父さんは、女性関係にだらしく、奥さん以外に別の女性は何人も居る、田舎政治に首をつっこんで、料理屋を飲み歩いて、お金を使う。こういった人でした。経済観念がまったく無い。若くして、その種田家を継いだのですが、ちょっと父性が欠如している。そういう感じの方でした。

お母さんのフサさんは、それを苦にしまして、おそらくそうだったらしいのですが、そのご主人が、別の女性と一緒に物見遊山に行っている間に自宅の井戸に飛び込んで、死んだというわけです。山頭火が11歳のときでした。

そのとき、山頭火は、裏の物置（倉の中）で、友達と一緒にお芝居ごっこをして遊んでいた。そしたら、なんか大人が騒ぎ出したので急いで行ってみた。そして、井戸から引き出された、亡くなった母親の青い顔を見てしまった、というわけです。

村上護さんという、すばらしい山頭火の研究者がいらっしゃいます。私も、その方の著書からいろいろ教えて頂いています。彼によると、ある聞き込みをしていたら、山頭火のお母さんは井戸に飛び込んだのではなくて

首をくくった、という説をもっている人もいたそうです。

こういうことがあって山頭火は大きな衝撃を受けた。そして、後々に山頭火自身が「私の不幸は、母の自殺から始まった。」という記述をしております。まさに、生みの親との分離体験を、11歳でするわけです。

そのあと彼は、山口中学に行きました。中学時代から俳句を作ったり、文学にふけったりしたあと、早稲田大学の文学科へ入学いたしました。ところが、1年も修了しないで、「うつ」のような、神経が衰弱する状態になって、ぶらぶらしていました。そして、その2年後、田舎に帰ってきました。のちに山頭火は、神経衰弱のために退学した、という書き方をしています。山頭火に精神的な具合の悪さが、ここで初めて起こった、といえます。

そのあと、帰ってから、財産を無くしたお父さんと、造り酒屋をやるのですが、うまくいかない。そのうまくいかない中でも、地方の文芸雑誌に文章を載せたり、俳句を作ったりしています。さらに、萩原井泉水に師事して、自由律俳句を創っています。萩原井泉水の自由律俳句というのは、従来の典型的な形を無視し、五七五も無視する。それから、季語を使わない。そして、心の想いを、気持ちを綴った、こういう俳句です。

結局、種田家は破産してしまい、彼は、奥さんのサキノノさん、子どもと一緒に、俳句の友達を頼って、熊本に移住します。まあ、逃げ出すわけですね。そして、熊本では額縁店「雅楽多」を営みます。しかし、やはり商売はあまりうまくいきませんでした。

たまたまその頃、養子に出されていた、弟の二郎さんが、養子先から追い出されて、徳山の山の中で、自殺してしまいました。これも山頭火にとっては、非常にショックでした。それで、商売もうまくいかない山頭火は、単身上京して、東京の一ツ橋図書館に勤務しました。ところが、その山頭火の生き方をみて、奥さんの実家は、山頭火に失望して「うちの娘と離婚しろ」というんです。それで、山頭火は離婚届にハンコを押しました。

そして、その頃から、彼はまた、神経衰弱が起こって、結局、退職してしまいました。退職して東京でぶらぶらしているんですが、関東大震災がありまして、びっくりして、家に帰ります。

奥さんもすごくよく受け入れていると思いますが、山頭火も一生懸命、また額縁屋をやるといいます。しかしながら、やっぱり、商売には身が入らないんですね。そして、後でお話しますが、彼はお酒が大好きで、酒に飲まれる、というか酒におぼれるのです。

最初はほろほろ酔うのですが、しまいに、ぼろぼろになっちゃう。ぼろぼろになるまで飲んじゃう。ほどほどで止めとけばいいのに、ぼろぼろになるまで飲んじゃう。

そして、自分がどれだけお金を使ったかもわからない。ま、こういう状況になってしまうのです。

あるとき、熊本でお酒に酔いまして、進行中の路面電車の前に仁王立ちします。電車を止めてしまうのです。自殺しようとしたかどうかは、どうもはっきりしないのですが、ものすごく酔っぱらってたんです。それで、止められた電車の乗客たちがみんな降りてきて、今にも集団で山頭火を殴らばかり。

ところが、ある男がでてきて、山頭火の袖をつかんで、急いで引っ張って逃げます。そして、報恩寺というお寺に連れて行きます。そのお寺のお坊さんが、とにかく、俺が引き受けてやる、というわけで、お寺に住み込むこととなります。

そのお寺で出家、つまり、坊さんになり、耕畝という名前をもらいました、味取観音堂という、非常にさびしいお堂のお堂守になりなさい、といわれて、そこで一人暮らしをいたします。

ところが、寂しいんですね。そうすると、彼は、山林独住に耐えきれず、解くすべもない惑いを背負って、行乞流転の旅に出るわけです。

要するに、ふらふらと、放浪してしまうのです。東京に出たのも、一種の放浪に近いものかもしれません。そして、九州あたりを行乞放浪しながらぐるぐる回って、お布施を頂きながら、木賃宿を泊まり歩きます。

そうかと思うと、友人に一間を借りてもらい、そこで一人で自炊生活をしたりする。しかし、そこにちょっと居ると、もういたたまれなくて、また放浪の旅に出る。

そしてあるとき、小郡（山口県）の其中庵という草庵に住んで暮らすのですが、やはり寂しくて駄目なわけです。酒を飲んでしまう。そして、54歳のときも、彼は自殺未遂をしています。カルモチン（睡眠薬）を飲んで死のうとしました。しかし、お金が無かったので、死ぬなかった。その薬は大量に服用したら死に至りますが、大量に買うお金が無かったのです。

それで、また死に場所を求めて、放浪の旅に出る。こういうことを繰り返すわけです。そして、近畿から東海、さらに木曾を通過して、裏日本に行ったり、北陸にも行ったりしています。歩くんですね。

最後は、松山市に一草庵という庵を作ってもらいまして、そこで、しばらく暮らします。しかしながら、昭和15（1940）年、59歳のときに脳卒中で亡くなる。これが山頭火の生涯です。

これは（スライド）、亡くなる4年前の山頭火の写真です。こういう形で笠を持って全国放浪して歩いています。

次は（スライド）、其中庵といひまして、山頭火が住んだ庵です。友人がみんなて工面してくれた、こういう、寂しい、貧しい家で暮らして、日記を書き、俳句を作り、そして、お酒を飲むわけです。お酒の飲み方も、泥酔してしまう飲み方ですから、何軒もの店を歩いて借金を作ったりする。そうすると、お友達に「金を貸してくれ。」という。借金がありますから、金貸しからは借

りられません。だから、友人たちに「お金を送ってちょうだい」ということとなります。

そうすると、山頭火の友人たち、素晴らしい友人が何人かいて、金を送ってくれるんです。甘えてるといえば、甘えてる。あるいは、甘えの山頭火である、ともいえます。そして、45歳頃から、放浪の旅に出る。これを繰り返すわけです。

この山頭火の生き方は、実は、昭和40（1965）年代、要するに、わが国が経済で追いつけ追いつけ越せで、高度成長の勢いが増してきたときに、ブームになりました。むちゃくちゃに働いて、これが人間か、という気持ちが、当時の猛烈サラリーマンの中に芽生えたんでしょうね。そして、山頭火のような生き方が人々の心を打った。それから今度は、平成9（1997）年の辺りですか、要するにバブルが崩壊していく頃、そして、企業社会が非常に厳しくなったときに、また、こんな生き方で人間いいのか、というようなその時代に、山頭火がまた話題になりました。

3. 山頭火の病態 — 一体化の願望

では、山頭火の病態はどんなものだったのでしょうか。早稲田を中退するときに、神経衰弱状態になっています。その後、東京の二ツ橋図書館で働いていて、また衰弱状態になり、退職願を出しています。

「自分儀病氣ノ為メ退職致度候間 御許可被成下度診断書相来へ比段相願候也」（病氣のために退職いたしたく候、どうかお許しください……。）と、当時の後藤新平、東京市長に辞表を出している。実はその、診断書が残っています。私はその診断書を別の文献で見せてもらいました。これによると、退職に提出した診断書の病名は、神経衰弱症です。

「頭重頭痛不眠眩暈食欲不振等ヲ訴へ思考力減弱セルモノノ如ク精神時臆トシテ稍健忘症状を呈ス健度時亢進シ一般二顔ル重態ヲ呈ス」

このように診断書に書いてあります。

われわれの視点からみますと、うつ病とちょっと違うんですが、おそらく、うつ病に近い状態なんですね。早稲田大学のときに悪くなったのも、おそらく同じだろう、と推定されますし、その後、東京の図書館を退職するときもそう。それから、其中庵で具合が悪くなったときの症状も似通っています。それ以外にも、熊本で奥さんと暮らしていたときにも似たような病態を繰り返しています。

私は、その病態の背景に、実は、一体化ということがあると思っています。一体化、解け合いたい、一瞬ぴたりくっつきたい、人間はそういう願望をみんなもっています。一体化願望です。友達となら、とことん一緒にやり、あるいは、夫婦はできるだけ解り合いたい、というのです。

だけど一方で、一体化するということは、自分を無くすことにもなります。したがって、一体化と逆の個別化の願望ももっています。われわれはその間に引き裂かれるんです。実は、われわれは一体化の願望と個別化の願望の間で、引き裂かれた存在なんです。

ところが、そのどちらかが一方だけ強くなってしまうと、人として変わった人になってしまうんですね。山頭火は一体化の願望が非常に強かった。人との一体化を彼は限りなく求めています。例えば、友達とはできるだけ親しく、最後まで付き合う、という気持ちが非常に強いんですね。特にそれはお酒を飲むと出たようです。山頭火は、酒を飲むと、心が打ち解けあい、非常に饒舌になったんですね。自分の心の内をどんどんどんどんしゃべるわけです。

ところが、相手が一体化の願望と個別化の願望とが適当な割合の人物だったりすると、その人は辟易して「たまねえなあ」ということになります。また、一体化ですから、山頭火には、人の財布も自分の財布も同じことになります。それから、もう一方では、彼には自然との一体化の観念もあったと、私は思います。それは後で話します。

したがって、一体化の病理的な現象としては、依存という現象がどうしても起こります。それから、甘えが強くなります。この依存、甘えが満たされなければ、失望感、あるいは、喪失感を味わいます。ある面では、そういう自分に対しての自己嫌悪をもったりする。そのときに抑うつ状態に落ち込むと考えられます。

うつ病になった人を見ておきますと、一体化の願望がかなり強い人が多いですね。例えば、会社と一体化して駄目になる人が多いですね。疲れきってしまう。燃え尽きてしまう。最後は自殺念慮まで出てきてしまう。

山頭火はこの一体化の願望が非常に強い人物だったと思っています。それをうかがわせる文章を山頭火本人が書いています。

「家庭は牢獄だとは思わないが、家庭は砂漠であると思わざるを得ない。夫は妻を、妻は夫を理解しない。……中略……理解していない親と子と夫と妻と兄弟と姉妹とが、同じ釜の飯を食い、同じ屋根の下に眠っているのだ。」こんなものはたまらないと一体化できない苦しみを訴えています。

でも、考えてみれば、妻と夫なんて一体化なんてできません。一体化したらいいかもしれませんが、そんなに一体化はできません。だから、あなたはあなた、わたしはわたし、会えるときだけ会っておきましょうね、お互いに距離をおきましょう、というのが、世のルールで、離婚しない夫婦です。恋愛は限りなく一体化を求めます。だから、恋愛結婚は別れる人が多いんです。でも、山頭火は、そんな一体化をずっと求めているのです。

したがって、山頭火の病態を医学的に少し考えてみますと、山頭火自身が、実は、自分の病気のことを述べて

います。「私の新緑病もそろそろ良くなって、気力が出て参りました。」なんて手紙を書いているのです。きちんと自分の精神状態が落ち込むときがあることをわかっている。あるいは、「例の神経衰弱状態がまた始まりました。」自分でも病気の存在として捉えているんです。

どういう症状から始まるかという、心身の疲労感、それから不眠です。そうすると、山頭火はアルコールが非常に好きなものですから、ついアルコールに逃げ込むわけです。しかも途中で止まらないアルコール依存症ですから、目が覚めたあとの山頭火は、自己を責める、さらに自分の苦しみが強くなる、悲哀感も深まり、不安も深まり、焦燥感もでる。俺はなんてだらしないんだろう、生きるに値しない、という罪責感も起きます。そうすると、またアルコールを飲む。これを繰り返すわけですから、だらだらと長く続く症状になってしまいます。

しかし、うつ病という、従来われわれが診ているうつ病とは、少し病状が違うところがあります。例えば、われわれが診ているうつ病の方は、うつ病になるたびに何度も放浪の旅に出るなんてことはありません。うつ病があるから寝たきり、動けない。あるいは、外へ出ていけない。たまには、家族に行き先を知らせないで出て行ってしまう、という例はありますが、本来のうつ病の人はどこにも行きません。家の中に居て、暗い部屋の中でじーっとしているのがうつ病です。こういう病状とは、彼の場合は違っています。

実は、H.J. Weitbrechtという人が1952年にいっているのですが、Endo-reactive Dysthmic、内因反応性気分失調症という概念があります。このEndo-reactive Dysthmicというのが彼の病態に合っているような気がします。

Endo-reactive Dysthmicというのは、心理的な負荷が起こるとき、自律神経の失調症が起こる。つまり、眠れない、ドキドキするなどの症状が起こってくる、という状態がありまして、純粹の内因性うつ病とも違います。そうかといって、財産を無くした、最愛の人に死なれた、その途端にうつに陥っているという喪失うつ病とも違うようなのです。リアクション、つまり、反応性のものとも違う感じですが。このEndo-reactive Dysthmicというのが、山頭火の病態に合っているのではないかと、私は思っています。

このうつ状態の発病状況として、H.J. Weitbrechtは、一つは身体的な病気とか、流産とか、出産とかをあげていますが、一方で山頭火にぴったりの状況をあげています。「ふるさとの喪失」「よりどころの喪失」そして、「職業的、社会的な地位の喪失」ですが、まさに山頭火のそれです。さらに、「愛するものとの離別」。これは、お母さんとの離別が一番大きいでしょう。これらが、長期にわたる心理的な負荷をあたえる結果、不機嫌、不安全感、不安感、あるいは、自律神経失調症などの、目立つうつ状態を露呈する。そして、この経過は、だらだらと長く続く。おそらく、こういう病態だったのだと思います。

ます。

この病態がわかる俳句があります。

「唄さびしき隣室よ青き壁隔つ」

これはある宿屋に泊まった時の句らしいですね。

「火鉢火もなしわが室は洞のごと沈めり」

非常に寂しい時期です。

「あてもなく踏み歩く草みな枯れたり」

山頭火はしばしば植物を俳句の中に詠んでいます。

「雪の中人影の来てやがて消えけり」

「かなしき事のつづきて草が萌えそめし」

「暑さきわまる土にくいいるわが影ぞ」

彼は熊本に奥さんと子どもを残して、東京に行くのですが、そこでも、

「勞れて戻る夜の角のいつものポストよ」

「悲しみすみて煙まっすぐ昇る」

やはり、こういう心理を表している句です。

ところが、お坊さんに保護されて味取観音堂に暮らします。そこで、お酒も飲まないでじっとしていて、ときどき、周りの家に行って、お友達と話をしたとき、彼の気持ちは少し落ち着くんですね。

「松風に明け暮れの鐘ついて」

「松はみな枝垂れて南無観世音」

ちょっと寂しいけれども、なんとなく心が落ち着いている感じがします。

ところが、それからしばらくすると、彼は45歳にして放浪の旅に出ます。

山頭火の俳句で一番有名なのが、

「分け入っても分け入っても青い山」

これはさっきの写真でみた、坊さんの格好をして、山の中を辿っていくときのことでしょう。どこまで行ってもどこまで行っても青い山。青い山、というのは、ブルー、「depression」「うつ」を意味します。ブルーマンデー、マトニティブルー、あのブルー。山頭火もそのブルー、青い、というのはうつ、であります。

「炎天をいただいて乞い歩く」

「笠にとんぼをとまらせて歩く」

もまた、やっぱり自然と一体化しています。しかもまだ酒を飲んでいまして、

「ほろほろ酔うて木の葉ふる」

これもなかなかいいですね。

いいですね、って、飲まない人にはわからないですけど。

あるいは、「述懐」と題して、

「笠も漏りだしたか」

あるいは、「自嘲」と題して、

「うしろ姿のしぐれていくか」

「鉄鉢の中へも霰」

あるいは、

「雨ふるふるさとはだしであるく」

先ほどのクナイブ療法に、水に素足で触れることが素

晴らしい、という話がありましたが、まさにそれですね。「雨ふるふるさとはだしであるく」とは、わざわざ履物を脱いで、はだしになって歩いて、そして、その冷たい感覚を味わうということですね。

「雨にうたれてよみがえったか人も草も」

「行きくれてなんところらの水のうまさは」

そして、放浪を続けるわけです。

「てうてうひらひらいらかをこえた」

あるいは、

「月からひらり柿の葉」

「やっぱり一人はさみしい枯草」

「うまれた家はあとかたもないほうたる」

ところが、晩年になるとだんだん、落ち着いてきます。

「落ちついて死ねそうな草もゆる」

また草がでてきます。

「抜けたら抜けたままの歯のない口で」

「だんだん似てくる癖の父はもうあない」

「たんぼぼちるやしきりにおもう母の死のこと」

彼は行乞放浪の間、母の位牌を背負って、歩いておりました。亡くなった母との限りない一体化を、できない一体化を、彼は求めているのです。

「ともかく昼寝のまくら一つ持つ」

これなんかもう悟りの境地ですね。

「いつか死ねる木の実を蒔いておく」

これなんかも、いわば園芸療法の根幹を成すものですね。自分は死ぬんだけど、木の実を蒔いておく。

「焼かれる虫の匂ひかんばしく」

これにもそういう感じが現れています。

実は、山頭火が救われたものにいろんな要因があるのですが、まず一つは、彼が俳句を作ったというその活動です。亡くなるまで自由律俳句を作り続けました。そして、作ることによって、自分の苦しい心境を、あるいは自然との一体化を俳句に詠み込んでいきました。

それから、彼は行乞している間、ずっと日誌を書きます。あるいは、短い文章を書きます。それらを全部とおきまして、1冊のノートが完了するたびに、木村緑平という親友に送る。そして、保管しておいてもらっています。こういう創造の世界によって、彼はやはり救われたな、と思います。

俳句がなかったら、山頭火はないでしょう。現実的な意味でも、山頭火は俳句で助かっているのです。というのは、山頭火が俳句を作るようになりますと、友人、仲間、まあ、句友とか俳友などといいますが、俳句を作る仲間ができます。そうすると、行乞放浪して、俳人のところに尋ねていけば、「山頭火さん、よく来たね。」と迎えられ、「層雲」でかなり有名になってからは、「ああ山頭火先生よくいらっしゃいました。」とあって、料亭に連れて行ってごちそうしてくれる。帰りにはお饂飩をくれるわけです。山頭火に俳句がなかったら、それはできない。つまり、彼は俳句と、その素晴らしい友人に恵ま

れたということですが。

また、別れたけれども、妻子の存在は非常に大きなものでした。最後は、子どもさんが山頭火に仕送りをしています。奥さんも勝気な立派な人だったということですが、離婚した山頭火が転がり込んでくると、とにかく、支えているのです。

そして、もう一つの救いは、その行乞放浪です。一か所に定住したい、そういう気持ちで、山頭火自身にはきわめて強いんです。放浪して歩いて行くと、自然の中で癒されてきます。そうすると、だんだん元気が出てきます。そうすると、俺は住みたいなあ。一か所に住んでゆっくりと暮らしたいなあ、やはり寝床が恋しいなあ、となるんです。そして、お友達に頼んで、庵を貸してもらって、定住します。

定住して、しばらくは調子が良いんです。ところが、そこでお金が入って、お酒を飲み、べろべろに酔って警察に保護されると、次の日に「俺はまったくなさげない、お友達に世話になってお金借りて、そして支払いをすませて、そのあと、やっぱり死んだほうがいい。」っていうことで、また放浪の旅に出る。この定住と漂泊を繰り返します。どっちも、彼にとっては、ある意味では救いなんです。しかし、ある意味では、定住はまた病原となる。しかしながら、その病態が行乞放浪によって救われた。

しかもその中で、特に一つの心性として、この自然との一体化があると、私は思っています。要するに放浪の旅に出て、この青い山、あるいは草花の咲いている野原、そういうところを彼は歩いて行きました。そして、自然の中にたっぷりと浸り、自然に癒される。そのときに、自然と一体化するようになります。

もう一つ、実は山頭火の救いとして、酒があるんですね。ところがこれは、実はきわめて相反する要因でもあります。つまり、ある面では救いだけでも、ある面では落とし穴なんです。落とし穴と知りながら、そこから逃げられない。そこに山頭火の病理があるんですね。

弱さだけではないかもしれません。ちょっと前に戻りますが、実は、Endo-reactive DysthmicのEndon(内因)、そちらの要因も考えないといけないと思っています。というのは、お母さんが自宅の井戸で自殺した、弟さんも山の中で首をつって死んだ、というような、比較的、抑うつに傾きやすいメンタルがあった。山頭火には、そういうこともいえるかもしれません。

いずれにしても、酒は、救いでもあるけれども、地獄でもあることを、山頭火自身が書いています。

特に、自然との一体化でありますけれども、自然との一体化と癒しということで、いくつかの解説が配布した資料に書いてございます。彼はどうしようもなくなって、放浪の旅に出るんです。そして、体調が悪いので、

最初はとぼとぼ歩いて行きます。場合によっては、どこかで死んでもいいなあ、と思っているんです。

「死のまえの木の葉そよぐなり」

これなんか、そういう心境なんですね。

「生死のなかの雪ふりしきる」

ところが、その自然の中に浸って歩いてますと、

「濡れてすずしくはだして歩く」

これなんかはクナイブの水の効用ですね。あるいは、

「身に触れて萩のこぼるよ」

山頭火自身が書いています。「私は、本山僧堂にも入らず、西国三十三所の巡拝もせず、ただ茫々として歩きつづけて来ました。山は青く水は流れる、花が咲いて木の葉が散り、私もいつとなく多少のおちつきを得ました。」

自分でちゃんとわかっているのです。自然の中で放浪して歩くことによって、自分の抑うつ的心性が、いつとはなく、少しずつ少しずつ癒されていく。これはおそらく、自然との一体化が満たされるからではないかと思えます。

実は、「分け入っても分け入っても青い山」そして、「ほろほろようて木の葉ふる」といって、山の上に行きました。そして、「まったく雲がない笠をぬぎ」真っ青な青空、雲一つない山頂に辿り着く。そのときに彼自身が、自分のかぶっていた笠を取って、そのまったく雲がない空に浸る。これがまさに自然との一体化で、自分が自然と溶け合って、そして自然と融合した存在として居る。こういうことが彼の非常な救いになったのです。

したがって、この山頭火の生涯をずっと振り返って考えてみますと、彼がする句作という創造の行為が、そしてまた、自然との一体化が、彼の救いになったと考えています。

俳句には、植物が詠まれることが多いのですが、特に、山頭火が植物をたくさん詠み、それが自分の心の叫びになり、自分の支えになり、その植物と自分が同一化していく。こういう境地が抑うつからの救いに連っているのです。

こういうことが、人間・植物関係学会の皆さまが、この植物と人間の関係、あるいは、自然と人間の関係を考えるうえで、一つの示唆を与えてくれる、と私は思います。

こんな風に、自然を感じた人がいる。こんな風に、植物に自分を託した人がいる。花に、木の葉に、自分の存在を詠み、そしてそれと一体化した人がいる。

こういう存在を知ること、これが園芸療法をやっているとき、その背景の一つとして、あってもいいのではないかと、思いながら、今日はお話をさせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。